

平成二十二年五月一日発行（毎月1回1日発行）通巻八四四号
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

火星

平成二十二年五月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

干物屋のバケツに挿せる桃の花

青年が自転車で来し涅槃寺

竹林をぬけきし蓬摘の籠

白湯沸きしよりの立ち居やお中日

壺焼のテントの奥に予約席

燈台の灯のまたとどく椿叢

天草をももいろに干し端午かな

端午かな藻屑まみれの綱跨ぎ

杖抱いて牡丹の中に座しませる

学校の朴の花見ゆ峠かな

太白星

柳生千枝子

のんのんと春くる予感雲動く
人恋ひの夜の白椿見てをりぬ
朝寝して春めく雨を聞きぬたり
チューリップ開き陽気な叔母がくる
陽炎が炎えをり学校帰りの野
太陽が好きではこべら犬ふぐり
貝重く提げ灯台は灯るころ

杉浦典子

春隣えんぴつ描きの地図持つて
棟上げのつづきに鬼をやらひけり

月おぼろ天狗の面を祀る山
うすらひの下ゆるやかに水うごく
下萌や水抜かれたる池を見に
神棚に忘れられある花の種
鴨帰るころなり鍵を預けらる

浜口高子

椿象の緑こぼれし枯木宿
水仙の切口ま白海荒るる
紙風船に頬ふくらます七回忌
うつ伏せの舟の高さに葦の角
まんさくやご免ねと子の転勤す
梅小路の短き線路しゃぼん玉
掘りはじめらる山独活の枝のさわぎ

火星作品

山尾玉藻選

耕しし土の寒さをまたぎけり
池干されあり櫛の芽に紅すこし
桃の日や泥まみれなる父の靴
葱抜くに力あまれり鳥の恋
囀の下自転車濡れてをり
追難の星へ開けたる蔵の窓
恋猫の鳴き尽したる暁の月
寒卵こゑを真つ赤に産みにけり
くるまされて寝息の二月礼者かな
わんさわんさと紅梅の苔みたる
対岸の山明けて来し白魚舟
潮風に颯うすく蓬摘む
霾や陵の水弛みなし

大和郡山城 孝子
明石戸栗末廣
八幡大山文子

陵に礼す遠足横一列
 夕東風に干すはらからの喪服かな
 ぶつかつて柱なしけり野焼の火
 紅梅に稚児行列の待ちぬたり
 朧夜や用水光りつつ走り
 玉砂利に砂利の足さるる春祭
 鎌倉の風にふくらむ春シヨール
 検札に残雪の山続きをり
 うどんの香すなる二月のコンコー
 蝶の来し橋のたもとの車夫溜り
 雨粒の膨らんで落つ牡丹の芽
 羽毛一つ淀みに廻る春の昼
 柀を挿して針江は水あます
 やらはるるまで鬼どものうろろす
 山伏の尻皮羨し追儼式
 水音のせはしくなりし末黒かな
 面取りに山雲湧ける吉野雛
 宝塚蘭定かず子
 豊中廣畑忠明
 神戸深澤鱻

選のあとに

山尾 玉藻

耕しし土の寒さをまたぎけり 城 孝子

田畑が耕される料峭の候は漸く暖かくなつたと思えば寒さがぶり返し、自ずと人のこころも揺れやすい。早春の冷たい風の中、鋤き返した土を踏ぎながら作者のこころも少し冬へ後戻りしたのだらう。この頃の微妙な寒さを指す季語に「余寒」があるが、そのような微妙な季節感を具象的に捉えたのが「土の寒さ」である。「土をまたぎし寒さ」ではない。

寒卵こゑを真つ赤に産みにけり 戸栗 末廣

産卵を告げる鶏の一声は、辺りの寒気を一瞬緩ませるほどの張りつめた甲高いものであつたのだらう。そのような声を瞬時に「真つ赤」と聞き止めたところは鋭く、鶏鳴との阿吽の呼吸なるものを感じる。

陵に礼す 遠足横 一列 大山 文字

御陵は宮内庁管轄下にあることが多く、我々庶民は遠巻きに眺めることしかできない。この遠足子たちも門扉の前に整列し、引率の先生に促されて一礼をしたのであらう。「遠足横一列」がこの上なく明快である。

ぶつかつて柱なしけり野焼の火 蘭定かず子

左右から駆けてきた「野焼の火」がぶつかり合つた途端、焰が思いがけない高さに立ち上がったのである。中七までの直截な表現によつて、火と火が体当たりした瞬間の音さえ聞えるようで、空中に立ち上つた炎の物凄さが実感できる。臨場感ある写生句である。

検札に残雪の山続きをり 廣畑 忠明

新幹線か特急列車内の囁目句であらう。窓外に残雪の峰々が続き、車内では検札をする車掌の声が穏やかにひびいている。連なる「残雪の山」を眩し気に眺めながら、車掌の声に耳を傾け、悠揚と早春の気配を楽しんでいる作者である。

柵を挿して針江は水あます 深澤 鱧

以前、鍛練会で訪ねた近江の高島市針江地区の湧き水は、誠に豊かで清澄であつた。あの日は春の雪明りの川端を巡つたが、節分を迎えた川端の景も趣あるものであらう。擬人法「水あます」が絶えることない生水の湧き様を語っている。

この作者は吟行での経験を何度も練り直し佳句を物する。「吟行は目的ではなく手段」を身をもって立証する人。

(以下略)

恒星圈

蘭定かず子

遠足の子に極彩の闇魔さま
入り用の金を夫より花菜漬
雪解野に工事予告を深く挿す
酢の香せる二月礼者でありにけり
ぶらんこにだれへともなく歌ふなり

飯塚 糸子

なやらひの鏡に映る長寿眉
島原に門二つある朧かな
鳩小屋の鳩出はらひし桃の昼
母の膝少し崩るる雛納
灯るまで間のある芽吹き槐かな

渡辺 数子

蒲公英の道のあやふき一輪車
額照つてゐるチューリップ島かな
沈丁花路地の仏の貌暗し
裏山のはだれ眩しむ尼僧なり
春の雪明りに昼の髪洗ふ

大山 文子

まみどりの紙より出でし干鰈
電線に雨粒むすぶ初音かな
寺田屋を見上ぐ舷鳥雲に
風が雲掃ひし午後や雛飾る
料峭や音に遅れて鯉の波

渡邊 美保

鈍色に光るビル街春疾風
節分の太鼓の響き足下より
立春の田に鶴の羽根片びらき
みづうみの白帆見てゐる雪間かな
梅の香の奥覗きけり当麻寺

獅子座

山尾玉藻推薦

根本ひろ子

涼野海音

岩井ひろこ

川音のときれぬ 一間姫始
雛眺めぬる横顔を見てをりぬ
振り向きし野焼の顔のおそろしき
猫の子のレールを越えてゆきにけり

天谷翔子

田中文治

早春のピアノに映るサキソフォン
きさらぎの槐に蟬の殻ひとつ
夜さりの倒して遊ぶ紙雛
春昼の灯りてゐたる軒行灯

松井倫子

松山直美

春浅しターザンの蔓ぶらさがり
魚の氷に上り連山うすくれなる
堀めぐりの舟より見上ぐ春菜畑
路地奥に手押しポンプや覆れる

荒れきたる海をうしろに金盞花
雛あられ銀行員にもらひけり
お地蔵に涎掛けやる春シヨール
霧天の骨董市に父の声
尼寺の先に用あり梅三分
桃の日の天窓高く開けあり
山菜を真青に湯搔き雛の日
反抗期というが子にきし雛かな
焼いもを割つて話の変はりけり
校長の校門に立つ春の泥
仏前に僧のうなづく雛あられ
諍ひのつづきし敷地路のたう

日まみれの冬たんぽぽと猫車
薄氷を押し分けてくる鴨の胸
山の日の躓くところ路の臺
啓蟄や隣家解体始まりぬ